

議事概要（令和6年度愛知県陶磁美術館運営会議）

座 長：本日ご欠席の委員からは独立行政法人化への懸念、今後のボランティア活動への期待を記したご意見をお預かりしている。

現在、当館はリニューアル工事中であるが、長寿命化工事のため、本当の意味でのインパクトは少ない。そのなかでどのような事ができるのかを考え、取り組みをおこなっている。敷地内施設の名称変更や案内看板の刷新により、「目指せやきもののテーマパーク」ということで、わかりやすく魅力的なアップデートを行っている。一方で西館は新しく猿投窯の調査研究センターとすることで、学術方面もしっかりと取り組んでいく。

委 員：わかりやすさと専門性のあえて二兎を追う姿勢が素晴らしい。休館中にもかかわらず、陶芸館を含め多くのイベントを実施しており、それぞれが愛陶独自の内容となっている点を評価したい。一方で、令和6年度館報 p. 69 に掲載されているように、来館者数を評価基準としているが、表面的な来館者数ではなく本来は p. 3 の基本理念にどれだけ近づけたかも含め質的な評価を導入すべき。例えば館外で開催されたイベントの参加者数や、調査研究や作品収集なども評価に加えてはどうか。社会的役割も含めてどのように評価をしていくのが独法化におけるポイントになるように思う。

座 長：ご指摘の通り、来館者数のみの評価基準では愛知県美術館と比較にならない。それゆえ当館の独自性に基づく試みの新たな評価づくりを考えている。

委 員：休館中の取り組みについて素晴らしいと思う。観光においても、昨今は一般の人へ向けた体験プログラムが人気であり、モノ消費からコト消費への移行が顕著である。この流れのなかで、愛陶の独自性に特化していけばいいのではないか。

X（旧 Twitter）における投稿をいつも見ているが、いろいろな職員の投稿があつてとても身近に感じる。このような投稿はフォロワー数などにどのような効果があつたのかを知りたい。また、新たな客層の確保といった意味では、愛陶独自のノウハウを活かした企業研修に取り組んではどうか。同様に学びという点では「あいち県民の日」にあわせて子どもたちが学べるような企画を打つと集客に繋がるかもしれない。さらに、愛陶は緑豊かな広い敷地があるので、キッチンカーを呼ぶなどしてご飯を食べながら土に触れてくつろげるようにすると、新たな過ごし方の提案にも繋がり、足が向くようになるのではないか。

座 長：愛知の陶磁産業を鑑みれば、現在に至るまでの盛衰を繰り返してきた歴史がある。そのような知識は企業研修で役立てられると考えている。

事務局：投稿とフォロワー数増加との詳しい要因は定かではないが、休館中だからこそお伝えできる内容、あるいは大河ドラマや季節など時事に即した内容とすることで、フォロワー数を伸ばしている。

委員：休館中における多くの事業実施を高く評価する。座長からも話があったテーマパーク化について、広大な敷地内に施設が点在しており、家族連れがやきもの文化に触れながら憩いの場を提供できる可能性がある。

座長：かつて当館は一方的な「見せてやる」という在り方をしていたが、現在は「ようこそ」という来館者主体の在り方への変化を目指している。その例が分かりやすく親しみやすい看板の設置である。他方、植栽の手入れという最低限の予算がつかない現状もあり、このままの状態での独法化は困難である。

委員：館報 p.74「利用者の状況」について、平成6年の数値が急に伸びている。その理由はなにか。

座長：1994（平成6）年の本館増築オープンに当たる。

委員：2005年は愛・地球博で20万人の来場があったにもかかわらず、来館者は伸びていない。ここ最近ではジブリパークが開園したが、何か連携の仕組みづくりはしているのか。その他、敷地内の大窯復旧も検討してほしい。

座長：現在、ジブリパークとは当館だからこそ出来る内容の濃い連携を協議している。一方でディズニーランドと地元の美術館の関係のように、施設の近さと入館者数の増加は結びつかない。単純にジブリパークの広大な敷地を見て回るのに疲れて当館へは来られない。よって「近さ」ではないアプローチの仕組みづくりが必要と考えている。
他方、ジブリパークを訪れるであろう子どもの団体や、あるいは大学連携も視野に入れつつ取り組みを行う予定である。

委員：長寿命化による休館中でも活発な館外活動を行っており、評価できる。先程、座長からも話があったように、近年、愛知県立芸術大学も地域連携を意識している。たとえば大学院で「インクルーシヴアート」の実践的授業を音楽科・美術科対象に行なっており、その一例として「やきものから長久手を知る」というイベントを長久手市文化の家で開催し、陶磁美術館からアドバイスやサポートを受けている。

また、本学は先立って独法化をしているが、予算面では切り詰めている。一方でプロパー採用により職員同士のチームワークが深まっており、長い目で見ればプラスの側面もある。陶磁美術館はやきものを専門としているため、県美よりさらに社会とコミットしやすい。今後も県美との連携をしつつ、特に社会性をもった役割に期待したい。

座長：国立美術館・博物館の独法化においても良い面はあった。しかし、それには最低限の予算をつけるなど、まずは現状を立て直す必要がある。県芸、県大とは今後、パートナーシップの見直しなど、さらなる連携が求められる。パートナーシップの学生があまり来ていないのも改善したい。

委員：昨年、常滑陶芸作家協会は、瀬戸陶芸協会との共同展を陶磁美術館で開催した。作家たちにとっても良い刺激になったので、ぜひまた開催したい。4月には常滑陶芸作家協会展で陶磁美術館学芸員に講演会を依頼したほか、陶磁美術館の改修工事にあたって洗面鉢を制作した。今後も協力できることがあれば前向きに検討したい。また陶磁美術館 WEB ページにおいて、アイチクロステックによる企業との協働で作成された収蔵品の3D画像を興味深く拝見した。小・中学生でも興味を引くような内容なので、より解説を平易にして、エントランスにモニターを設置して見せても良いかもしれない。

委員：2022年に本館廊下・芝生広場で開催された「やきもの現代考」のような若手の展覧会をどんどん開催してほしい。また、やきものは生まれるべくして生まれたものなので、人々の「祈り」をテーマとするような、原点に帰る企画も期待したい。陶磁美術館は自然に囲まれ、一日中遊べる場所なので、食事を楽しめる施設を誘致し、小さい頃からやきものに触れる機会を作り出してほしい。常滑陶芸作家協会との合同展も、ぜひ美濃を含めて開催したい。

委員：岐阜県の美術館館運営にも携わっているが、陶磁美術館の多様な活動と理念を高く評価する。陶磁美術館の所蔵品は世界に誇るべきものであり、地域の人や子ども、あるいは地域の外の人にも、一人でも多くに観てもらえるようにしたい。今後も絶対に守っていくべき施設である。

座長：コレクションは美術館活動の根幹であるため、高い評価を受けるのは有り難い。

委員：今年、瀬戸市政は95周年を迎えた。そのなかで今秋には国際芸術祭「あ

いち」の地域展開事業があり、多くの来市が見込まれる。来年は国際芸術祭の本展、せともの祭、万博 20 周年が重なり、国際的な注目を集める。瀬戸市も陶磁美術館と協力体制を築きたい。新瀬戸駅や尾張瀬戸駅からのバス路線強化など、瀬戸市内、瀬戸市外から訪れやすくなるようにしたい。5 年後には市政 100 周年を控えているので、それに向けてのカウントダウンも含め、ともに盛り上げていきたい。大窯を復旧し、子どもが土の魅力を再確認する体験ができるといい。